

# 沼津市若山牧水記念館

第38号

2007.3.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX 055-962-0424  
http://web.thn.jp/bokusui/

わが友を見送るけふのわかれの酒  
いざいざ酌めな別れゆかぬとに 牧水



作品はいささか奔放に、しかし文字の配列もよく書かれている。酔いが適度に回っていたのであろうか。通常なら扇面の要に向かつて縦書きされるものが、扇面の縁にそって書かれており、それだけでも貴重な資料であろう。裕氏は「沼津は父が一番愛した地。ゆかりの品なので里帰りさせるのにふさわしい」として送別会の集合写真とともに、沼津牧水会林理事長に手渡された。なお、扇の裏面には当日出席した記者仲間の寄せ書きがある。大正九年というと、牧水が沼津に移住した年で、八月一日に牧水が、その月末に加藤進氏が沼津に来たという親しみもあつたかも知れない。

送別会のあつたのは、写真の裏に大正一〇年二月とある。その頃の牧水は貧しさの極致にいたらしい。歌集『くろ土』に大正九年一二月の「貧窮」と題する歌が載っている。

居やぬちすくみて家内しつけし一銭の銭なくてけふ  
幾日経いひだちにけむ  
抽匣ひきだしの数の多さよ家のうちかき探せども一銭  
もなし

といった生活が展開されていたのだ。沼津での暮らしが安定するにつれて、雑誌、新聞などの選歌料収入などにより余裕が出て来るのだが、大正一〇年の初めにはまだ困窮の中に居たに違いない。

しかし、そんな中でも人が来ると料亭で大盤振る舞いをして見せる牧水だったと言う。加藤氏との交流もそんな形の中で行われたのだろう。記録によれば、四月には穂積忠、北原白秋と痛飲したこともある。とまれ墨痕鮮やかな白扇は、当時三七歳の牧水の日常を彷彿と想像させてくれて興味が尽きない。(須永秀生)

昨年一〇月一五日(日)の第五三回沼津牧水祭碑前祭の当日、一本の扇子が沼津牧水会に寄贈された。寄贈主は東京都目黒区に加藤裕さん。父親の故加藤進さんは、報知新聞沼津特派員として沼津に大正九年(一九二〇)八月末から翌年の二月まで勤め、沼津記者倶楽部を創設するなど活躍した。転勤で沼津を去るに当たって記者倶楽部が開いた送別の会に牧水が出席していて、別れのしるしにと、即興の作品を扇子に書きとめて贈ったものである。

## 牧水随想

# 鉄路―牧水の汽車―

榎本尚美

若山牧水（明治一八年〜昭和三年）が航空機に関心を示したことは『館報』第二三号に書いたが、鉄道にも相当な興味を持ったことが彼の歌から推察できる。

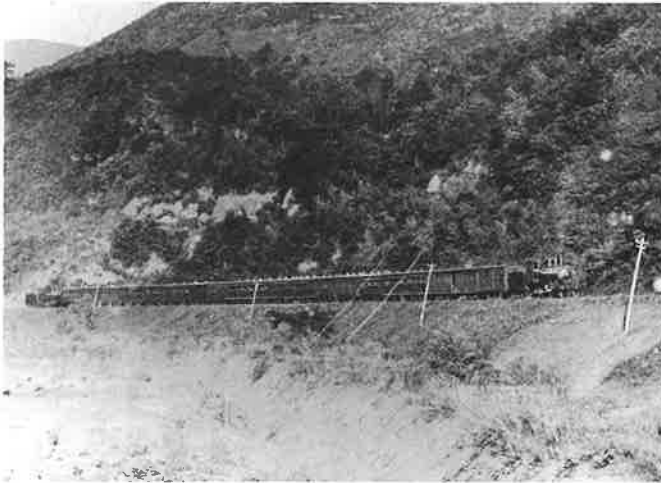
牧水が生涯に詠んだ約八八〇〇余首のうち、駅・汽車・停車場・機関車など鉄道に関わるものが一二二首あり、またその中に「汽車」という言葉を詠み込んだものが五十六首見られる。

うとうとと汽車にねむればときをりに法師  
蟬きこゆ山北あたり

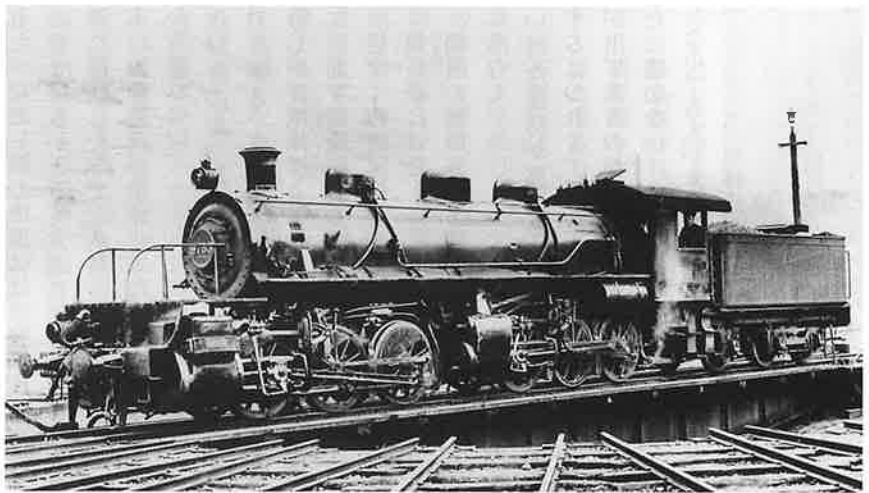
相模なる松田の駅に下りてゆく小間物商も  
秋めけるかな

これは牧水が大正一〇年（一九二一）沼津から上京するとき詠んだものだが、当時東海道本線は丹那トンネルが出来るまで、沼津から御殿場・山北・松田を経て国府津に至る箱根山の北を回る現在の御殿場線を通っていた。東海道本線は明治二二年（一八八九）に開通し蒸気機関車（SL）が列車を牽引したが、海拔四五五mの御殿場を越える水平距離一〇〇〇mに対して二五m登る二五%（パーミル）の急勾配の連続には、後押し補助蒸気機関車（補機）を必要とした。

下り（御殿場經由沼津方面行）は山北から、上り（御殿場經由東京方面行）は沼津から、それぞれ補機を付けて押し上げ、頂上の御殿場では特急や急行は停車せず走りながら補機を切り離すという離れ業を行った。



急勾配の坂を前の機関車が牽引し最後尾の補機が押す



シリンダーが4個、動輪が6軸もあるアメリカから輸入されたマレー式機関車

この線区には大正元年（一九一三）ドイツ及びアメリカからシリンドラー四個、動輪六軸の牽引力の強い大型マレー式蒸気機関車が輸入された。万世橋の鉄道博物館に展示されたのはドイツ製のそれである。補機として動輪四軸のD50型SLが有名だったが、山北（駅前）と沼津（高

沢公園)には往時使われた強力なD52型SLが保存展示されている。

山北や沼津には峠用のSLを留め置いた線路跡が今も残り、鉄道員も沢山住んでいた。差別用語で「キシヤキチガイ」という鉄道ファンを男は鉄ちゃん、女性を鉄子と言うらしいが、昔は鉄道員そのものをテツチャンと呼び、山北のテツチャンは訛りが強い「山北言葉」で有名だった。

丹那トンネルは大正七年(一九一八)に掘削が開始され、難工事のあげく昭和九年(一九三四)に完成し、東京から沼津までが電

化されたが、それは牧水没後六年目であった。元の東海道本線は御殿場線と改名され戦時中に単線とされたが、松田・御殿場間は酒匂川の溪谷に沿って登るため八箇所あるトンネルや七箇所ある鉄橋の橋脚は今も昔のままに複線分残されている。軌道敷の中も二倍あり、富士岡や岩

波などにはスイッチバック跡の築堤が富士山の眺めのよい展望台となっているというように、

複線だった頃の名残が今も随所に見られ、そのつもりで眺めると興味を持てる線である。峠の難所だった御殿場線も現在は急勾配用の電車が走り、小田急新宿駅からJR相互乗入れ座席指定特急「あさぎり」が富士山を眺めながら沼津まで二時間足らずで一四往復するようになり、相模原の自宅から乗運寺の牧水墓所や沼津市若山牧水記念館へ行くのに非常に便利になった。

平成一九年(二〇〇七)九月の若山牧水顕彰



富士の裾野を黒煙を吐きながら進む蒸気機関車

全国大会は、牧水の好んだ富士の裾野の裾野市で開催と伺ったが、この方面にお出かけの節はこんな鉄道の歴史も思い出していただきたい。

丹那トンネル(七八〇四m)開通後、沼津との間に新たに東海道本線が敷設され、その沿線にあった宿場町三島には三島大社の北方に駅が造られ、近年は新幹線の駅も出来た。それまで町外れにあった旧東海道本線(現在の御殿場線)の三島駅は下土狩駅と改称された。トンネル開

通後も電化区間は東京から沼津までだったので、SLと取り替えるため沼津にはどんな列車も停車せざるを得なかった。牧水は

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり

と詠んだが、野末の宿場町がこんなに発展すると思っただろうか。

昔は汽車の速度が新幹線の五分の一程度だったため、御殿場から沼津を経て富士川鉄橋まで右の車窓に富士山がゆっくり眺められたので、次の歌も出来たのだらう。

草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂の朝の葡萄酒

ところで、九州の日豊本線は大分・宮崎県境の宗太郎峠が難工事で完成が遅れていた。そのため牧水が上京するには日向市細島港から神戸まで船、あとは東海道本線という長旅であった。早稲田大学入学のため初めて上京した牧水は、楽しみにしていた車窓からの富士山が生憎の雨で見られなかったと残念そうに書いています。そしてある晴れた日の朝、東京の下宿からあこがれの富士山を眺め驚喜した。

初夏の富士こそ見ゆれあさ雲のひくく流るる相模の西に

その頃東海道本線は、神戸から新橋まで約二〇時間、運賃は三円七六銭だったという。これは職人一週間分の手間賃に匹敵したとかで汽車賃は昔から高かったのである。

停車場に札を買ふとき白銀の貨のひびきの  
涼しき夜なり

牧水は大学卒業後東京に住んだが、その頃の  
都内の鉄道はどんなだったろうか。新橋・池袋・  
品川と言えば繁華街だが、当時汽車は新橋、今  
でいう汐留が終点で、後に東京始発になった。

廃駅ならむといへる新橋の古停車場の  
夏の群衆

麦ばたの垂り穂のうへにかけ見えて電車  
過ぎゆく池袋村

現代人には信じられないだろうが、品川駅は波  
打際であり車窓の下が海だった。それが埋め立  
てられて今のようになって仕舞ったと、横須賀  
に住んだ私の母久枝がよく思い出話をしていた。  
六月の濁れる海をふとおもひ午後あわただ  
し品川へ行く  
今もそうだが昔から終電車には赤い燈を点灯し  
たらしい。

あさくさの夜露に濡れしわが袂はさまく惜  
しき赤電車かな

牧水が大正六年（一九一七）に住んだ山手線  
沿いの東京巢鴨一二五〇番地の家は貨車や列車  
が通る度に揺れた。遠くからドラフト音を響  
かせながら近づく貨車の煤煙を眺めているうち  
やがて庭のはずれに植わった薔薇の葉が揺れ始  
める。（『海より山より』『線路のそば』参照）

ゆさゆさと揺れ立つ重き葉のひびきう暗  
き窓のうちに聞ゆる

地盤が悪かったのか、振動で花の一つが落ちた  
りする。その汽車を眺めていた喜志子も次の二  
首を詠んだ。

をりからの汽車のひびきにわが庭の茨あや  
ふくゆれをののけり

尾を引きて長鳴る汽車の笛きけぼうたがひ  
もなき秋の冴えかな

ちなみに、藤沢市は地盤が砂だったので、線路  
近くの家は列車が来る度に地震かと思うくらい  
よく揺れた。

自然を好んだ牧水は早稲田大学入学後、国木  
田独歩の『武蔵野』に触発され、同級の土岐善  
磨と歩き回り「旅ゆきてうたへる歌をつぎにま  
とめたり思ひ出にたよりよかれとて」の詞書き  
で

立川の駅の前茶屋さくら樹のみちのかげ  
に見おくりし子よ



JR 中央線立川駅前牧水歌碑

汽車過ぎし小野の停車場春の夜を老いし駅  
夫のたたずめるあり

などを詠んだ。立川駅前の歌碑は御覧になった  
方も多いかと思う。今は立派な駅ビルだが、牧  
水の詠んだ明治三十九年（一九〇六）前後の古茶  
屋はどんなだったろう。

半世紀前に私が北アルプスの白馬岳（二九三  
二m）から唐松岳（二六九六m）へ縦走した時  
登山口の大系線信濃四谷駅は屋根もろくにな  
く、ホームも一本で寂れてはいたが風情のある  
駅だった。そこへ客車二両ほどを牽いたタンク  
機関車が止まる。その印象を今でも懐かしく思  
い出すのだが、最近はその白馬岳と改称され  
立派な駅になってしまった。昔から山肌の雪が  
溶けて代掻き馬の模様が現れるのを農作業の目  
安としたので白馬岳と呼んだ。それがいつの間  
にか誰が付けたか知らないが「はくば」になっ  
てしまい、昔の田舎の駅の思い出は崩れ去った。  
恐らく牧水の頃の立川駅もそんなだったのでは  
ないかと想像する。

立川駅前の歌碑は昭和二五年（一九五〇）  
一月に建立された、牧水一三番目の歌碑で、  
当時小学生だった牧水の孫童子が除幕した。

その時喜志子は次のように詠んだ。  
亡きひとの若かりし日に詠みし歌石に刻ま  
れてここにも残る

その喜志子の古里が信州であったこともあつ  
て、牧水も好んで信州を旅し、随筆『信州一巡

と浅間温泉」に

高崎駅から安中磯部と過ぎて、横川駅に近づくころから漸く『旅』めいた心地になる。(中略)横川で電気機関車と代る。そして直ぐ所謂碓氷廿六個のトンネルにかゝる。トンネルからトンネルの間に見上げ見下す山嶺溪流、ことに若し樹木を見ることが愛する人であつたならば其処の峻しい傾斜山腹に茂り茂つて居る老樹たちの静かな姿を望み見て、久し振に『自然』の片々とその呼吸に触るるの感ずるであらう。トンネルを抜け終ると其処に実に思ひもかけぬ広大な高原のひらけてゐるのを見る。浅間火山の裾野である。即ち汽車は信州路に入つたのだ。

と書いている。

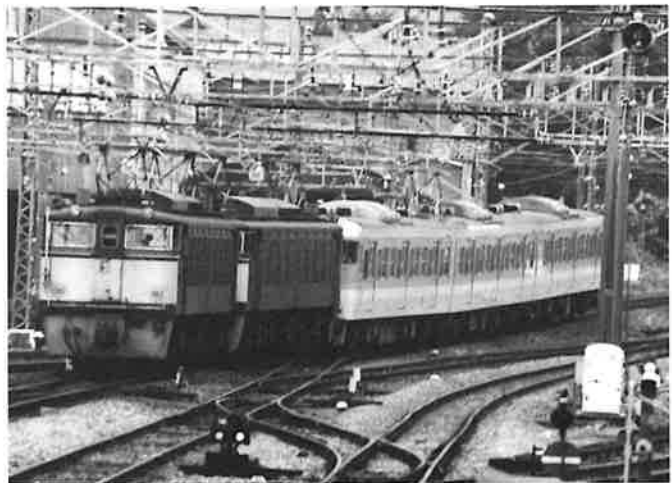
以前は蒸気機関車が煤煙とともにトンネルを走っていたが、碓氷峠が電化されたのは大正一〇年(一九二一)五月である。

そして「八月の初め信州軽井沢に遊びぬ」の詞書で

虫に似て高原はしる汽車のありそらに雲見  
ゆ八月の昼

さらばなり信濃の国のほととぎす碓氷越え  
なばまた聞かめやも

とも詠んでいるが、今では長野新幹線が東京から軽井沢までトンネルをくぐつて一時間一〇分で達してしまうので、碓氷峠のアプト式軌道の



横川駅構内で電車を牽く EF63 型電気機関車

旅情などは全く味わえなくなつた。年をとると急がない旅もしたくなり、早いばかりが能でないと思うようになる。横川駅でED42型アプト式機関車が前後に増結され、ゴトンゴトンと走り出す情景は今でも目に浮ぶ。

昭和三八年には峠に新線の完成とともに、急勾配用新型電気機関車EF63型が登場し、昔から多くの人が懐かしい思い出を持ったアプト式軌道は廃止された。それが消える前には私を含めた多くのテッチャン達がわざわざ現地へ眺めに行つたものだった。

一寸注釈を加えると、碓氷峠は六六・七%の勾配つまり水平距離一〇〇〇mに対して六六・七mの高さを登る急坂で、車輪が滑つて坂を登れないため、機関車の歯車を線路の間に設けた鋸歯状の引つかかり(ラックレール)に噛ませて登つた。

アプト式の基地横川には鉄道跡地を利用した「鉄道文化むら」という、懐かしい昔のEF53型電気機関車などが展示され、電気機関車の運転など鉄道ファンの驚喜する公園がある。

この碓氷峠を越えた小諸は牧水が滞在した町だが、小諸城址の懐古園には明治四三年(一九一〇)に詠んだ歌が石垣に彫られている。

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびし  
ものはなつかしきかな



小諸懐古園の牧水歌碑



磯部公園の「温泉マーク」由来解説碑

この歌碑は昭和四年（一九二九）に沼津の千本浜公園に建てられた第一号に続いて昭和九年（一九三四）に出来たものだ。城の石垣の字は見つけにくいので、現地でせひ探して頂きたい。白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ

これも同じ頃と同じ所で詠んだもので、共感する人が多いのか、小諸や佐久にはこの歌碑が四基、全国には七基見られる。

「歯にしみとほる」の余話・・・牧水は子供の時から歯が悪くて、母マキを困らせたが、歯の白玉が歯に沁みだすと思う人もいるそうだ。

次は、横川から三駅手前の磯部の話である。大正六年（一九一七）六月「その日妙義山に志したれど心変りて磯部に泊る」との詞書きで、気まぐれの途中下車して温泉町停車場出れば葉ざくら暗し

湯の町の葉ざくら暗きまがり坂曲り下れば  
深川の見ゆ

と詠んだ。駅近くの磯部公園にこれが歌碑として残っている。

磯部公園には北原白秋、川田順、久保田万太郎、水原秋桜子など一七基の碑も見られ、さらに、湯船から湯気が三本立っているいわゆる「温泉マーク」は磯部温泉が発祥の地という由来解説の碑も見られる。牧水の歌碑は公園の真ん中にあるのですぐ見つかる。

牧水は信州とともに上州も気に入って、生涯に八回旅するほどの所だった。大正一年（一九二二）一〇月に『みななみ紀行』の旅で、暮坂峠を越えたときの詩「枯野の旅」が、牧水の唯一の詩碑として昭和三二年（一九五七）に建てられた。

乾きたる

落葉のなかに栗の実を

湿りたる

朽葉がしたに橡の実を

とりどりに

拾ふともなく拾ひもちて

今日の山路を越えて来ぬ・・・

この詩が掲載されているのは、紀行文『みななみ紀行』ではなくて、随筆『樹木とその葉』である。

この旅では廃線になった草津軽便鉄道や上越線沼田付近で不思議な形の電車へ乗った、と記している。はたしてそれはどんな電車だったのか。軽井沢から草津へ行く草津軽便鉄道は軌道間隔七六二mm（新幹線の約半分）だが、明治政府から建設許可が下りたとき「時速八哩を超過せしめることを得ず（制限速度毎時一三km）」という条件であった。そのため本当かどうか知らないが「催したとき飛び降りて目的を達し、再び列車に戻れる」とも言われた。

スイスなどでは公害の少ない登山鉄道全盛なのに、我が国は経済優先とはいえ情緒のある優雅な鉄道が消えたのは惜しいことだ。

少し脱線して話はスイスに飛ぶが、齋藤茂吉は汽車へ飛び乗った話を紀行文に詳しく書いている。夫人とスイス旅行中、ルツェルンからエングフラウの麓インターラーケンに抜ける山の中のブリーニツク峠で「三〇分停車」というのを聞き、夫人を車内に残したまま、駅の食堂で小料理をとり葡萄酒など楽しんでいる内に列車は無断で発車してしまい、一町ほど追っかけて飛び乗って事なきを得たという。乗り損なったら、怖い奥様にさぞ絞られたらう。ヨーロッパの汽車はベルも汽笛も鳴らさず、黙って発車するので、気をつけないと・・・。

東京へは日本全国から多くの人が集まった。

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中に  
それを聴きにゆく 石川啄木

東北出身の啄木も故郷の訛りが懐かしいとて上野駅へ行った。この歌のように昔は「駅」と言わず「停車場」と言った。

牧水の汽車の歌一・二首中「停車場」を詠み込んだものが四〇首見られる。喜びと悲しみの交錯する停車場だが、牧水の歌には出会いの悦びより、別れの感慨の方が多いようだ。

別れる日君もかたらずわれ云はず雪ふる午後の停車場にあり

冬の午後都はづれの停車場にかりそめなれど人と別れき

停車場の黒き柱に身をもたせ汝が行く国の秋をおもふかな

ふり返るなかれといのり人ごみのうしろ姿をじつと見送る

別るとて停車場あゆむうつむきのひとの片手にヴィオロンの見ゆ

また、大正七年（一九一八）に同郷の親友・延岡中学の同級生平賀春郊（鈴木財三）を東京駅に送って次のように詠んだ。

停車場の食堂の隅に人出入りしげきを見つ  
つ飲みて別るる

入替作業のSLを詠んだこんな歌もある。  
水無月の青く明けゆく停車場に少女にも似て動く機関車

われ人もおなじ心のさびしさか朝青みゆく  
夏の停車場



高千穂峡近くの「幾山河」の歌碑

最後に、「幾山河」の牧水歌碑一三基の一つが牧水出身地に近い高千穂にもある。そこへは延岡から高千穂鉄道のディーゼルカーが、風光絶佳な五ヶ瀬川渓谷に沿い、日本一高い鉄橋を渡るのである。それが平成一七年（二〇〇五）の台風で鉄橋が流され、残念ながら長期運休になってしまった。私の好きな路線だったので、何とか復旧してくれたらと秘かに思っている。かくの如く、歌から察しても牧水は好奇心旺盛で、飛行機にしろ、汽車にしろ関心を持っていたようだ。もう少し長生きしてもらい、ジェット旅客機で空の旅を楽しみ、ブルートレインやカシオペアなどにも乗ってもらいたかったと思う。そうしたらどんな歌を詠んだらうか。折に触れてそんなことを思うのだ。

参考文献

齋藤茂吉全集（五）（岩波書店一九七三）／若山喜志子全集（短歌新聞社一九八二）／思いでのアルバム「草軽電鉄」（郷土出版社一九八七）／おのつよし「日本の鉄道一〇〇ものがたり」（文春文庫一九九二）／御殿場線物語（文化堂二〇〇一）／榎本尚美・榎本篁子『若山牧水歌碑インデックス』（改訂版）（二〇〇五）／「若山牧水歌碑インデックス」（訂版）（二〇〇五）／シンク二〇〇六）

「著者紹介」 えのもと なおよし



大正一四年三月東京都文京区生れ、昭和二三年大阪大学医学専門部卒業、昭和二五年国立相模原病院外科医師、昭和三二年医学博士となる。昭和三三年牧

水の孫若山篁子と結婚。昭和三五年国立相模原病院麻酔科医長。昭和四四年デンマーク コペンハーゲンWHO麻酔センターに留学。北里大学麻酔科非常勤講師、日本麻酔科学会麻酔指導医、日本麻酔科学会評議員などを経て、昭和六一年国立相模原病院副院長となる。平成二年同相模原病院退官。現在、身体障害者総合福祉施設アガペセンターセンター長、社会福祉法人日本キリスト教奉仕団理事長。主な著作に「若山牧水歌碑インデックス」「麻酔の第一歩」など。趣味は写真・ヒコキー・鉄道模型。文中には著者撮影の写真も掲載されている。

# 若山健海の『種痘人名録』を読み解く

伊藤卓雄

## (一) はじめに

時代は幕末、日本が開国の波に洗われていた頃といえ、百五十年も前のこと、六十歳代の者にとつて、祖父の、そのまた祖父の時代に当たる昔の話になります。そんな時代に、日向の国(現在の宮崎県)の山奥で、西欧伝来の「種痘法」を進んで実践した医師がいました。

かつて季語にも用いられた「種痘」という言葉も今や死語になってしまいましたが、これは当時大変恐れられていた伝染病である天然痘の予防接種のことです。その医師の名は、若山健海。恐らくその名を知る人は少なく、若山牧水の祖父といった方が分かりやすいでしょう。

## (お国自慢から)

数年前、大学時代の寮の親しい仲間たちが集った新年会での「お国自慢話」に出てきたのが、幕末の種痘伝来のことでした。日本に初めて種痘法をもたらしたのは、幕末の佐賀藩(現在の佐賀県)で、藩命を受けた藩医が導入に成功し、普及に努めたという知識を披露したのがS君。

これに対し、H君は、我が国で初めて種痘を行ったのは、若山牧水の祖父若山健海であると主張したのです。

H君とは、社団法人沼津牧水会の林茂樹理事長のこと、彼は、大悟法利雄著『若山牧水伝』(短歌新聞社)の中の「祖父若山健海」の項、若山健海の手になる『種痘人名録』や健海の履歴書の下書き等のコピーを送ってくれました。

実は、筆者もS君と同郷であることから、郷土自慢のこととなれば後に引けないし、加えて、現住地が埼玉県所沢市で、市内に若山牧水の歌碑があり、その祖父である健海の活動が種痘の歴史に関わるものとなれば、益々興味が湧き、健海探求の旅が始まったのです。

## (牧水の歌碑と健海)

牧水の歌碑は、市内の神米金という土地にあります。ささやかながらも観光スポットの一つになっています。この一帯は、江戸時代の享保期に開発された武蔵野新田の一部で、畑作中心の農村地域ですが、明治時代の初めに、当時、神谷新田、久米新田、堀兼新田と呼ばれた貧しい三村

が合併して神米金村となり、その後、周辺の村々とともに合併編入を重ねて今日の所沢市となったものです。

健海が生まれた文化八年(一八一二)当時、この土地は「神谷新田」でしたが、明治三十七年(一九〇四)にこの地を訪れた牧水の日記には「埼玉県入間郡富岡村字神米金」と記されており、彼は、早稲田大学に入学したこの年のうちに、二度(四月と十月)この地を訪れています。ここには、その後も代々続く若山家がありますが、当時、健海の従弟にあたる吉左衛門がま



所沢市の若山健海の生家





沼津市の若山邸内の牧水歌碑

だ健在で、牧水の訪問を大変喜んでくれたようです。

最初の訪問の時(四月二十二日)、牧水は、朝九時に下宿先(麴町)を出発し、同二十七分市ヶ谷発の汽車(甲武鉄道、現在のJR中央線)に乗り、国分寺で川越鉄道(明治二十八年開通。現在は西武鉄道)に乗り換え、所沢駅に十一時半頃に到着。ここから歩いて若山家に至っています。古地図には、旧所沢町の「峰の坂」(古道の分岐点で現存)から川越方面に真直ぐ延びる一筋の街道があります。その後、明治四十四年(一九一)

開設の旧陸軍所沢飛行場(その一部が今の航空公園)の拡張等もあって現在の道は迂回して

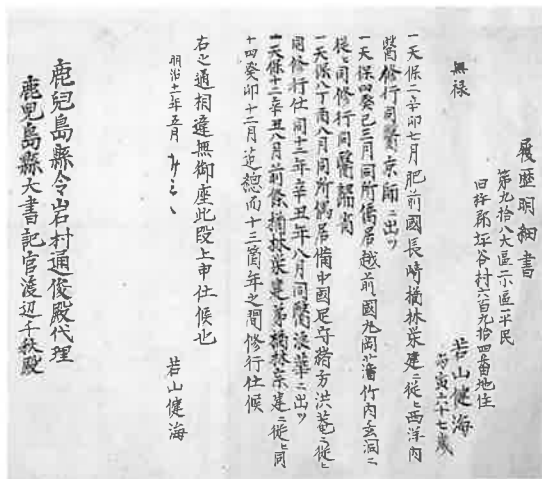
ますが、牧水は当時の街道を辿り、神米金までの「二里程」(実際には五キロメートル余りか)の道程を急いだことでしょう。今日では、所沢駅から二つ目の新所沢駅(西武新宿線)で下車し、川越方面行きのバスを利用するのが便利。乗車すること約十分、七つ目の停留所「下富」で下車すると、すぐ目の前に若山家とこれを取り巻く木立が見えます。

時代は下つて昭和五十三年(一九七八)、若山家邸内の木立の中に、牧水の没後五十年を記念して、地元の有志の手によって歌碑が建てられました。前面には、牧水直筆の

のむ湯にも焚火の煙匂ひたる山家の冬のゆふげなりけり

が彫られ、背面に健海と牧水を顕彰する碑文(大悟法利雄識)が刻まれていて、健海については  
醫師若山健海は文化八年この地に生れ、嘉永二年長崎に種痘の伝わるや率先して蘭人モーニツケに学びその普及に尽くした西洋  
医療伝来史上の輝かしい先覚者  
と記されています。

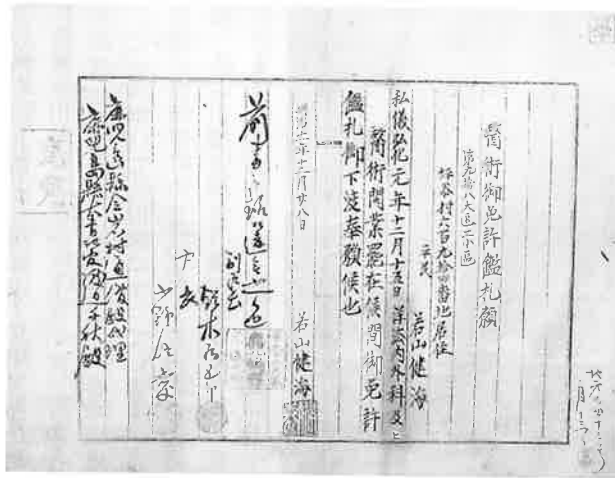
健海の生い立ちや履歴については「若山牧水伝」等に詳説されていますが、幼名は吉五郎、幼くして父と死別、母とは生別したため若山家を継ぐことなく、江戸で「生薬屋」に奉公の傍ら、文政八年(一八二五)七月から約三年半漢



健海の履歴明細書 (本会所蔵)

学者朝川善庵(ぜんあん)に学び、若くして故郷を後にすることを決意。その後九州に渡って、まず福岡で漢学者亀井昭陽(しょうやう)のもとで約二年半学び、さらに長崎へ赴き、蘭学・医学を学んでいきます。長崎では、天保二年(一八三二)から、鳴滝塾(なるとくじやく)の開設などシーボルトの活動を支援した医師の榊林栄建(さかきばやし えいけん)や、その弟で、後に牛痘法を長崎で初めて成功させたとされる宗建(そうけん)らに師事し、やがて医者(いしや)の道を選び、ついに、天保七年(一八三六)当時の日向国坪谷村(つぼや)に居を構え、弘化元年(一八四四)十二月からは同地で「内科西洋医療」を掲げて開業しています。

農家の出ながら勉学に励み、青雲の志を抱いて故郷を出、後ろ盾もないまま九州の地に至り、ついにそこで生涯を終えたのです。郷土への貢献などもなかった健海については、関心を持つ人もいなかったためか、彼に関する文献や資料がほとんど見当たらないのは残念なことです。わが国における種痘法普及の黎明期に活躍した人物ということであれば捨てては置けません。



健海の医術御免許観札願 (本会所蔵)

(二) 若山健海の『種痘人名録』

さて、前述の林茂樹理事長から得た貴重な資料の一つ『種痘人名録』は、沼津市若山牧水記

念館に所蔵されているものを複写したものです。この『種痘人名録』の原資料は、宮崎県日向市東郷町の若山牧水記念文学館に保管されている由。

これは、牧水の高弟大悟法利雄が、「若山家のことを調べているうちに、ゆくりなく発見した」(『若山牧水新研究』短歌新聞社)とされるものです。大悟法は、この中にある一文に着目して、種痘法(牛痘法)のわが国への伝来の時期に関して疑問を投げかけ、その発表当時(昭和十九年)議論を呼んだとされます。

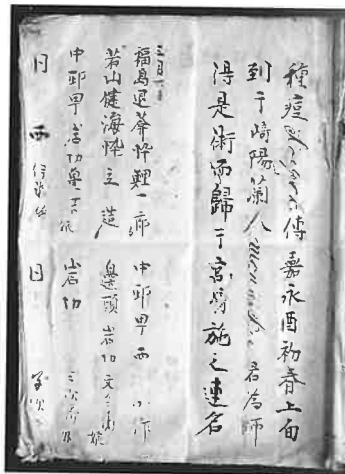
〔『種痘人名録』の概要〕

『種痘人名録』は、若山健海の自筆によると思われる墨書きの書面(和紙十一丁を和綴にしたもの、全二十二頁)で、表紙には、上部に飾り文字で「KEPOK」(オランダ語で「牛痘」の意)、中央に漢字で「種痘人名録」と大書されています。表紙裏には、「種痘の料金等の記載があり、徴収の時期は不明ですが、ある時期から、接種料を受け取っていたことが分かります。

次の頁以降が本文部分となっていて、冒頭に、種痘法習得に関する一文(三行)があり、一行分の空白に続いて被接種者の名前などが連記されています。そして、二十一頁目が空白で最後の頁となっており、裏表紙には、「嘉永酉載」(省淵廬主識)の文字が大書されています。この裏表紙の文字と表紙の文字は同じ筆致・筆勢のも



『種痘人名録』の表紙



『種痘人名録』の一頁目



『種痘人名録』の裏表紙

のと考えられるので、恐らく、同じ時期、つまり、「嘉永酉」の記載開始の時期に書かれたものと想像でき、当時の意気込みが感じられますが、その中身の部分は、その後の種痘実施のたびに逐次書き足したものとなっています。

なお、裏表紙の「省淵廬主識」とは、坪谷村の住居に名づけた「省淵廬」にちなみ、その「主」が記したという意味です。この文字は、健海が「膳椀人の箱などにまで」書き散らしていたと牧水は記しています。

さて、本文では、冒頭に次の一文(以下「冒頭文」)があります。

種痘Koepok傳嘉永酉初春上旬  
到于崎陽蘭人Monnickel君為師  
得是術而歸于宮崎施之連名

この文中、「Koepok」とは、表紙に記された綴りと同じで、「牛痘を植える」という意味で「種痘」に続けて書いたのでしょう。「嘉永酉初春上旬」とは、「嘉永二年(一八四九)の一月(旧暦)」を指します。また、「崎陽」とは、「長崎表」ともいわれた「長崎」のこと。「Monnickel」は、歌碑に書かれた「モーニッケ」(Mohnike)、オランダ商館付のドイツ人医師のことです。

冒頭文に次いで、一行分の空白があり、これ以降に、月日、地名、人名などが、上下二段に分けて列記された「連名簿」の部分が続きます。

この「連名簿」の最初には、まず、「三月六日」とあって、二人の名が記され、それぞれ年齢と

思われる算用数字が添え書きされています。この最初の二名は、「福島退庵伴鯉二郎」と「若山健海伴立造」で、まさに福島退庵と健海が、「宮崎」の地で初めて種痘を行った対象者(被接種者)なのです。彼らがそれぞれの息子に種痘を施すことによって、種痘自体に危惧を抱く当時の人々の不安を取り除こうとした姿勢を示すものとして注目に値します。なお、健海は、後年、次男純曾(幼名は縁司)にも接種しています。

この後に続く「連名簿」では、基本的に、種痘実施の日付けと地名・保護者と思われる者の名・子供等の続柄、時に年齢や人数が漢字で記されています。

三月六日の九人への接種を皮切りに、以後、四月六日の清武町及び今井町における接種まで、現在の宮崎市を中心とする地域での接種で、被接種者の数は四十八人と数えられます。この後は、同月二十七日美々津に赴いて以降五月二十五日までの間の接種(三十七人)が記されています。この美々津に赴いて以降の分は恐らく健海一人で行ったものと考えられますが、その吟味はさておき、「退庵と健海が日向国で初めて行った種痘」の被接種者の総数は八十五人を数えます。

なお、「連名簿部分」に記されている種痘の実施時期は、最初の嘉永年間に一期、安政年間に二期、文久と慶応の年間に各一期の、計五期にわたっており、この間の被接種者の総数は

二百四十二人を数えます。各期の間が途切れた形になっているのは、それぞれが天然痘の流行期に対応した予防接種として行われたことを意



当時の坪谷の若山医院

味すると思われる、それぞれの時期に適時に痘苗を入手できたこと一つをとってみても、健海的能力や人脈の確かさが偲ばれます。また、被接種者の保護者と思われる者の名前を見ても、延岡藩の出身である「陣屋」の責任者の名(宮崎御陣屋 菅波平右衛門)や美々津を中心に栄

えた商人の屋号を付したと思われる名(唐津屋、松屋、石阪屋、紀國屋、若松屋、伊勢屋、阿波屋、播磨屋、藤屋、京屋、堺屋)、さらに多種の職業名(塗師、社人、油屋、大工、木地師、左官、伯樂、髪結い、寺院等が並び、地名も彼の医業の活動範囲(港町美々津から種搦節で知られる椎葉山地や米良山地まで)を示すなど、その種痘活動に対する理解者・協力者が多方面広範囲にわたつていたことが推察できます。

ところで、このような健海の活動がなぜ注目に値するかを理解するには、種痘伝来の歴史を知る必要があります。

### (三) 種痘伝来事情

古くはモガリとも呼ばれ、また、疱瘡とか痘瘡ともいわれた天然痘は、有史以来人類を苦しめ続け、わが国でも幾度となく蔓延しては多くの人命を奪い、死に至らないまでも皮膚に酷い癩痕(あばた)を残し、人生に絶望をもたらず伝染病でした。

その予防法として決め手となる治療法はなかったが、経験的に一度罹患すれば二度と罹らないことから、人為的に軽い痘瘡に罹らせる方法(人痘法)が考えられていました。当初は、患者の膿疱から、痘漿(うみ)や痘痂(かさぶた)を採取して、これで健康な子供に接種する方法でしたが、この方法は、死亡率が高いなど危険性が高く、また、効果が不安定であることなど

から普及せず、後に牛痘法が確立されて以降は急速に廃れています。

### (略 史)

人痘法には大別して、主として鼻腔から入れる中国式と、腕に接種するトルコ式とがあり、後者はインドに始まったとされます。

わが国では、中国式が延享元年(一七四四)に長崎に伝えられ、筑前国(現在の福岡県)秋月藩の医師緒方春朔によって広められました。彼は、寛政元年(一七八九)の秋月藩の痘瘡流行時に、自ら考案した鼻旱(乾)法(人痘痂を鼻から吹き入れる)という「人痘法」を施行してその効果が注目され、江戸でもしばしば施行されたそうです。しかし、やはり、危険な方法であることには変わりがなく、より安全な方法を求める試みは続いたのです。腕種と呼ばれたトルコ式も到来しましたが、効果が安定しないなどで定着していません。

結局、有効かつ安全な方法としては、寛政八年(一七九六)英国の医師ジェンナーによって確立された牛痘法(牛痘のワクチンを接種するという方法)を待つほかはなかったのです。当時鎖国中のわが国では、外国への唯一の窓口であった長崎を通して、多くの医師たちが必死に牛痘法を学び取るうとしましたが、所詮文献等だけでは限度があり、キーポイントは有効な「牛痘苗」を入手することでした。国内の牛か

ら入手する試みをした医師もいますが、結局は、当時すでに実施されていた外国、といつても鎖国中のこと、僅かにつながっていたオランダや当時清と呼ばれた中国との交易を通じて輸入を試みるほかはなく、肝心の「牛痘苗」の入手は困難を極めました。様々の努力を経て、やっと有効な「痘苗」を入手できたのが嘉永二年(一八四九)のことです。藩命を受けた佐賀藩の藩医植林宗建らによる長崎における種痘の成功がきっかけで、瞬く間に国内に普及したとされ、それには積年の努力の蓄積と人的ネットワークが働いたとされます。

### (わが国での初成功と普及)

文政六年(一八二二)シーボルト来日の際、彼は牛痘苗を持参し接種を試みたが成功せず、以来、幾度となく痘苗の輸入が試みられたものの、それらがいずれも牛痘漿であつたため、長い船旅に耐えずに腐敗して活着(善感)に至らなかつたとされます。オランダ商館付の新任の医師モーニッケが嘉永元年(一八四八)の初来日の時にも、牛痘漿を持参してオランダ通詞の児二人に試みたが不成功。宗建は、わが国における人痘法による過去の経験に照らして、「乾燥し、安定している痘痂なら可能ではないか」と提言(宗建著「牛痘小考」)。モーニッケもこれを容れて、翌年ジャワから牛痘痂を含む新たな痘苗を取り寄せることになったのです。

翌年六月オランダ船が運んだ痘苗が到着するや直ちに、モーニツケは宗建の三男建三郎とオランダ通詞の子二人の計三児に接種し、このうち建三郎にのみ初めて活着（善感）したとされます。接種日は確定困難ですが、七月説が



原考  
牛痘ハ昔年歐洲國ニ於テ牧牛ノ者乳液ヲ採ルノ際偶之ヲ牛ニ感染シ給テ其善性ノ痘ナルヲト曉知シ爾後痘症ノ醫家之ヲ人體ニ傳授シ其輕安十全ノ功ヲ収メ一四之ヲ感スル者ハ絶テ天然痘ニ再感スルコトナキヲ曉知シ其術漸ク盛ニ行ハル今ヤ諸州ノ人民遍クコレヲ崇信スルニ至ルト本此説諸書ニ檢載ス茲歲嘉永二年夏六月西船其苗ヲ齎シ来リ本邦ニ此種スル丁哉時陽二種興ス如今傳授ス

『牛痘小考』・「種痘図」（国立国会図書館所蔵）

主（深瀬泰日著『わが国はじめての牛痘種痘猶林宗建』（出門堂））。このあと、宗建は建三郎の痘漿を用いて他の二児の活着に成功し、これらのことを佐賀藩に報告しています。佐賀藩では、宗建を佐賀へ呼び、藩医の子供たちに率先接種に成功させた後、藩主の嗣子淳一郎に接種し、これをきっかけとして藩内に普及させる

ことになりました。長崎では、モーニツケの意向を受けて種痘所の開設が計画され、奉行所の許可により江戸町のオランダ通詞会所で、同年七月二十四日から種痘が開始されました。ここへ国内各地から医師たちが種痘術伝授のために駆けつけることになったのです。その後、痘苗は、いくつかのルートを経て、広島、京都、大坂、福井、江戸などへ伝えられ、さらに国内各地へ広まりました。佐賀藩主に牛痘接種を進言し、宗建による牛痘苗の入手と長崎での成功のきっかけを作ったのは、江戸在住の藩医伊東玄朴。出身は佐賀藩の仁比山村（現在の佐賀県神崎市）で、前述のS君の故郷に近く、同郷の自慢の大先輩ということになります。玄朴は、藩邸に住む子供たちに接種しましたが、幕府のお膝元では反対の勢力が強く、普及の機会は、京都、大坂などよりさらに遅れます。彼は、八十二名の蘭法医と協力して、安政五年（一八五八）五月、江戸における初めての種痘館「お玉が池種痘所」を開設しました。民間の手による施設が、やがて幕府直轄となり、のちに西洋医学所などと改称され、明治になって政府所管とされ、今日の東京大学医学部の源流となるのです。明治新政府は、維新後直ちに西洋医学を基本とする医事制度の整備に努め、中でも種痘の普及に力を注ぎ、「種痘医」制度を創設するなどにより、組織的普及が進むことになりました。

それまでは、種痘が「植え疱瘡」とも呼ばれ、これを行う者が「植え疱瘡屋（師）」として文学作品上にも登場するような時代であり、医療制度も未整備でした。明治新政府は、種痘の安全確実な普及を図って、一定の要件を満たす者に「種痘医」として種痘活動に当たらせ、被接種者には「種痘済」の証明書が交付されました。今日のインフルエンザ予防接種の際に交付される「インフルエンザ予防接種済証」もこれを踏襲したものといえましょう。ちなみに、長崎での種痘以前に「わが国最初の牛痘接種を施行した者」として、「中川五郎治」の名があげられます。その時期は文政七年（二二四）で、モーニツケと宗建による成功より四半世紀も前のことになりましたが、五郎治の場合は、蝦夷地択捉島の番人であった時、シベリアに抑留され、そこで種痘法を学んだが、帰国後に一部の地域（松前・仙台）で実施したのとどまり、しかも、彼が医師でなかったためか、注目されることもなく普及するには至りませんでした。この事実を踏まえて、「モーニツケの種痘をもつて種痘伝来とする意見には賛成し難い」（川村純一著『病の克服 日本痘瘡史』思文閣出版）とする考え方もありますが、嘉永二年（一八四九）七月の長崎における成功によって、牛痘法がまたたく間に全国に普及したことは間違いない事実であり、これは組織的活動の結果

としての成功であり、公衆衛生の始まりとして注目すべきことなのです。

このような種痘伝来史に関して、大悟法は、前述の嘉永二年（一八四九）七月の種痘成功をもってわが国初とすることに疑問を呈しています。彼は、同じ年でも健海らが日向地方で行った種痘の時期の方が若干早いのではないかと主張しています。

大悟法は、その根拠として、前述した『種痘人名録』の本文冒頭文中の「種痘book傳嘉永西初春上旬」という記述から、「嘉永西」すなわち、「嘉永二年」の「初春上旬」（旧暦の一月）に「種痘book」が「傳わり」、この時期に、「到于崎陽」、つまり、当時の長崎へ健海が駆けつけて、モーニツケから種痘法の伝授を受けて、宮崎に帰り、そのすぐ後の「三月六日」に「本邦初の種痘を施行」したものと解しているのです。

### （「種痘人名録」を巡る議論）

さて、平成八年（一九九六）は、ジェンナーが牛痘種痘法を発明して二百年目。これを記念して、『日本牛痘接種関連文献目録』（日本医学史学会）が編纂され、また、これと前後して、わが国の種痘の歴史に関して注目に値する二つの著作が上梓されています。まず、平成二年（一九九〇）には、これまでの痘瘡史の総集編ともいえる大作（前出の『病の克服 日本痘瘡史』）が出版され、平成十四年（二〇〇二）には、深瀬

泰旦著『天然痘根絶史』（思文閣出版）が出版されていますが、これら多くの専門家による調査研究や著作論考の中に『種痘人名録』についての言及が全く見られないのは残念なことです。

筆者は、調査の過程で、田代学著『橘橋を架けた医師 福島邦成の生涯』（江南書房）という伝記本を入手しました。

この本の主人公、日向国の医師福島邦成は、『種痘人名録』に出てくる「福島退庵」のことです。『種痘人名録』については、「昭和十九年、若山牧水の高弟であった大悟法利雄が、宮崎市中心の村町の福島邸を訪れ、倉庫の中からこれを発見し」とあり、「この人名録にある記載内容に関して、大悟法が牛痘伝播の歴史に関して大きな疑問を投げかけたことが、日本医事新報、郷土誌等にも大きく取り上げられたのである。」という記述があります。

大悟法自身は「戦前に一度『文藝春秋』に書いた」と記していますが、いずれにせよ、そのときの議論の帰趨については、まだ確認できていません。また、『種痘人名録』の発見の経緯について、美々津出身のジャーナリスト黒木晩石の手稿（若山健海の「種痘人名録」について）に「昭和十八年の某月某日・・・牧水生家を調査中、その生家の母屋に隣接しておる既（馬屋）の二階において、全く予期せぬ一巻を、載積している反古の中に発見した。」とありますが、この点についても未確認のままです。

『種痘人名録』に触れた文献として筆者が発見できたのは、『橘橋を架けた医師 福島邦成の生涯』のほかには、僅かに二件。一つが、黒木晩石の手稿です。宮崎県立図書館（杉田文庫）に所蔵されていることを知り、コピーを取り寄せてみましたが、未定稿と思われる形であり、記述の時期が不明である上、肝心の牛痘苗入手の点に関し、痘漿の有効性を前提としている点などで論拠に無理があると考えられます。他の一つは、『宮崎県医史』（宮崎県医師会）です。歴史的資料に光を当てたという点では貴重なものですが、『種痘人名録』の内容紹介に当たって、縦書きの「連名簿部分」を横書きにする作業の過程で、記述の順序が狂い、資料価値が損なわれた点が惜しまれます。

なお、筆者は、平成十七年（二〇〇五）秋、沼津市若山牧水記念館を訪問した際、大悟法説に関する資料を見つけました。これは、大阪の医史研究家中野操氏が、当時の京都府医師会長土屋栄吉氏からの照会に対して、その検討結果を報告した私信（便箋九枚）と思われるものです。書かれた日付などは不明ですが、中野氏は、いくつかの文献を根拠に、『種痘人名録』の文中に「嘉永西」とある部分について、「嘉永「巴西」は、「庚戌」と書くべきところを健海が誤記したものであるとし、従って、健海らによる種痘の実施は、「日本医学史上」の定説を覆すような新事実とは考えられない」としています。

## (日向への情報と健海)

ここで、「種痘人名録」の冒頭文に戻り、種痘(牛痘)が伝わった時期として書かれている「嘉永西初春上旬」が、どのような時期だったのかを考えてみましょう。

そもそも、ここに書かれた「種痘(牛痘)伝わる」とは、「わが国へ種痘伝来」という情報<sup>が</sup>日向に住む健海の元に伝わってきたという意味に解されますが、その時期は嘉永二年(一八四九)の一月(旧曆)だったということになります。モーニツケが前年の嘉永元年(一八四八)六月初めて来日した際に持参した牛痘漿による種痘が不成功に終わったことは前述しましたが、その詳細は抜きで「種痘伝来」という話だけが伝わってきたのかも知れません。従って、健海がこの時期に直ちに長崎へ行つたとしても、肝心の有効な痘苗は得られなかったはずですが、そのまま空しく帰つたはずはなく、少なくとも種痘術に関する最新の情報は入手し、かつ、「今年の六、七月には再びオランダ船が痘苗を運んでくる」という情報ぐらいは得て、有効な痘苗の入手依頼をし、再来を期して帰郷の途についたのではないのでしょうか。あるいは最初からそのような情報を得ていた、その到来後の長崎行きを模索していたのかも知れません。

冒頭文の一、二行目から判断して、健海<sup>が</sup>嘉

永二年(一八四九)の一月に長崎へ出かけて種痘術の伝授を受け、「その年の三月六日の種痘実施に至った」と直ちに結びつけることには、やや無理があるように思えます。仮にこの時点で長崎へ出かけたとすると、「その年の三月六日の種痘実施」を成り立たせるには、前年にモーニツケがもたらした、無効だったはずの「牛痘漿」の残りを敢えて分けてもらって試みたか、何らかの別ルートで有効な痘苗を入手したとでも仮定しなければなりません。

この「三月六日の種痘実施」に関して、健海が記した「嘉永西」は、「嘉永戊」とすべきものの誤記であるとする考え(中野操氏)もありますが、健海の誤記とするのは忍び難く、やはり、「嘉永西初春上旬」は、種痘伝来に関する話<sup>が</sup>日向に伝わった時期を示すに過ぎないと解し、健海の長崎行き<sup>の</sup>時期については別に考えてみたいのです。

ここで、当時の健海の心情に立ち入ってみましょう。彼は、天保二年(一八三一)からの「總而十三箇年之間」の修行(履歴明細書下書)を終え、三十四歳の時、弘化元年(一八四四)十二月坪谷村で開業、翌二年には長男立造が生まれ、開業後約四年を経た弘化五年、すなわち嘉永元年(一八四八)は、医業も恐らく軌道に乗った頃と思われる。時に三十八歳。この時期、「嘉永一申仲冬」の作に「寒中遊于学」と題する漢詩があります。この中で、彼は、寒さも

いとわず勉学に励んだ日々を思い出すくだりに続けて、「豈惜老年應四十 高名他讓日安眠」と詠んでいます。「あの頃は良く頑張ったなあ」と若き日々を思い出しながら、「何も古い先を惜しむわけではないが、もうすぐ四十歳。名を挙げることが他の人に譲り、日々を安らかに過ごす。」とでも訳すのでしょうか、まだ平均寿命が短かった時代のこと、彼は不惑の<sup>ふたふた</sup>齡を強く意識していたように思えます。とはいえ、その頃、種痘に関する外国の情報は少しずつ彼の元にも達していたはずで、それらに接するたびに、「もう少し若かったら、名を挙げるチャンスがあるのに」と慨嘆していたのかも知れません。

その年が明けてすぐの、翌嘉永二年(一八四九)一月になり、「去年の夏、種痘が伝来した」というニュースがもたらされたとすれば、やはり長崎への気持ちに突き動かされたに違いありません。たとえその時点で痘苗が得られなかったとしても、その年の夏にも痘苗が再度輸入されるかもしれないという、貴重な情報を持ち帰って考えを巡らせているうちに、延岡藩に關わりのある福島邦成のことが念頭に浮かんだであらうことは、十分考えられることです。

## (日向での種痘と福島邦成)

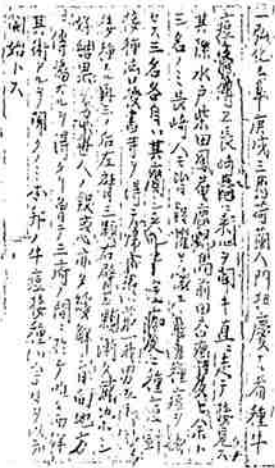
日向での種痘実施の時期を考えると、ここに一つの貴重な資料があります。先述の「橘橋を架けた医師 福島邦成の生涯」に紹介されて

いる福島邦成の履歴書です。

福島邦成とは、健海と一緒に種痘を行った福島退庵のこと。退庵は、延岡藩の藩医を勤めたりした人物ですが、その履歴(明治十七年の履歴畧抄)の中に次のような興味深い記述があります。

弘化二年庚戌三月荷蘭人門扭慶ナル者種牛痘□□傳エ長崎港ニ来ルヲ聞キ、直ニ走テ接見ス、其際水戸柴田鳳庵、鹿兒島前田杏齋及ヒ余ト三名ノミ、長崎人モ皆疑懼ヲ懐エ、種痘ヲセズ、三名各自ハ其齋シ来ル□□痘痂及ヒ種痘針、接種法口授書等ヲ得テ帰□□ハ第一我男五年□□接種スル、再三ノ后左臂三顆、右臂二顆漸ク感染シ好結果ヲ得、世人ノ疑惑亦タ緩解シ、日向地方ニ傳播スルヲ得タリ、曾テ三府ノ間ニ於テ唯タ西洋其術アルヲ聞クノミ、本邦ノ牛痘接種ハ今日ヲ以テ開始トス

著者(田代学)の見解の紹介及び論証は省



福島邦成の履歴

きますが、著者は、冒頭の「弘化二年庚戌(一八四五)は、「嘉永二年己酉(一八四九)の誤りだとしており、退庵が「種痘伝来」の情報を得たのはこの年の三月のことで、実際に長崎に向かったのは、それ以降だという考えをとっています。

『履歴畧抄』によれば、退庵は、天保七年(一八三六)の江戸遊学以来、天保十三年(一八四二)から翌年六月までの長崎留学を含めての満七年の修業を経て帰藩しましたが、その後「嘉永二年己酉四月藩庁に請願し、老親扶養の為官崎郡に帰住」しています。「官崎郡に帰住」の時期は、同年七月以降あるいはその冬とされ、その翌年の「嘉永三年四月に西洋医術内外科開業」(履歴細書 明治十三年の医業鑑札申受願)をしています。

「嘉永二年己酉四月藩庁に請願し」は、果たして何を意味するのか。健海がもたらしたかもしれない「嘉永二年己酉三月」「種痘伝わる」の報に、「直ちに長崎へ」と向かったとしても有効な痘苗などが入手できる時期ではなかったし、まして、はやる気持ちはあったにせよ、延岡で藩務に拘束されている身分でした。「今年の六、七月には再び蘭船が痘苗を運んでくる」という情報(これも健海情報かもしれないが)に、その時期の長崎行きを狙ったのではないか。技法習得と痘苗の入手に是非参加したいと願ったものの、おそらくは当時の延岡藩付きの頑迷な漢方

医達の反対にもあつて長崎行きは藩に受け入れられず、「老親扶養」の名目で帰郷を画策したに違ひありません。その帰郷を果たした可能性のある七月は、折しも、モーニツケと宗建らの種痘成功を受けて、長崎の通詞会所などでその技法などが伝授され始めた時期でもあり、その後全国から多くの医師たちが長崎に駆けつけて種痘術を実地に学んでいますので、彼もその時点で「直ニ走テ」戦列に加わつたと考えることができます。

(日向での種痘開始)

さて、退庵の『履歴畧抄』の中に登場する「水戸柴田鳳庵」とは、「水戸藩出身の医師柴田方庵」と思われますが、方庵は、江戸で朝川善庵に師事した後、天保二年(一八三一)七月長崎に赴き蘭医学を学んでいます。しかも、宗建とは昵懇の仲だったようで、当時漂着した異国船の船員達の診療を奉行所(幕府)の依頼で一絡に担当したりしています。

健海が善庵に学んだことは前述しましたが、同じ師を仰いだ方庵は、長崎行きに当たり、善庵の知己への紹介など便宜を計らつて貰っています。また、方庵より二年前に九州入りして文政十二年(一八二九)一月から福岡の亀井門下で学んでいた健海も、天保二年(一八三一)五月には同門を辞して、方庵と同じ頃長崎に赴き、同じ七月から榑林榮建のもとで勉学を始め、後



に弟の宗建に師事しています。決して偶然とは思えない事柄です。

この方庵が残した「柴田方庵日録」によれば、彼は、嘉永二年（一八四九）七月初め頃よりオランダ通詞から連絡を受け、同月二十四日江戸町オランダ通詞会所へ赴き、牛痘法を伝授されています。

当日の記事に「朝五ツ時、通詞会所へ行、蘭人種痘二行、今日十七人種……在留外科モンニー、船外科セフ、オッテンバヘル」とあり、「モンニー」とは、まさに「モーニツケ」のことと思われまゝ。その後、七日目ごととされた「種痘日」に出かけ、自らも実施し、八月十五日の項には「今日迄百三人ニナル」とあります。その後十月二十日に、彼は、種痘普及の目的で長崎を発ち江戸へ向かいます。途中名古屋で種痘を実施したりしていましたが、十二月半ば、長崎奉行所から急用との知らせで呼び戻され、年初早々に帰宅しています。

同じ「履歴畧抄」の中に登場する「鹿兒島前田杏齋」（後に「元温」と称している）については、「鹿兒島藩都城領において、嘉永二年十二月一日」に、極く内分にということで実施したとされます（「宮崎県医史」）ので、彼の長崎での種痘稽古は十二月一日より前となります。結局、方庵・杏齋と退庵の三人の滞在時期が重なり得る期間は、嘉永二年七月以降十月十九日まで一の期間以外にはあり得ないことになるのです。

実は、退庵の「履歴畧抄」の中に注目すべき記述があります。「痘痂及ヒ種痘針、接種法口授書等ヲ得テ帰ル」というくだりで、「種痘人名録」にある「得是術而歸于宮崎」に符合する記述です。健海は「得是術」としか書いていませんが、退庵は、モーニツケがもたらした痘痂と種痘針、そして接種法口授書、今風に言えばマニユアルを得ています。彼は、勇躍宮崎（当時の宮崎郡）へ帰つたに違いありません。そして、「再三ノ后」とあるような苦心の末ついに翌年、つまり「庚戌」、嘉永三年（一八五〇）の三月初めの接種成功に至つたものと考えます。痘痂であれば、それを入手した時期からこの三月までの数ヶ月の間でも痘苗の有効性は保たれたと考えてよいし、この間において、多分に健海の協力も得たことでしょう。「履歴畧抄」には、「我男五年」とありますが、これは退庵の五才の息子のことで、連名簿に記された名「福島退庵倅鯉一郎」に添書された「5」と符合し、このことは同時に、「若山健海倅立造」に添書された「6」が六才を意味し、とりもなおさず、立造（後の立蔵）の六才時、つまり嘉永三年に種痘が行われたことを示します。

「履歴畧抄」には、さらに、日向地方二傳播スルヲ得タリ、曾テ三府ノ間ニ於テ唯タ西洋其術アルヲ聞クノミ、本邦ノ牛痘接種ハ今日ヲ以テ開始トスと誇らしげに記されています。

退庵は、この輝かしい成果を引つぎ、翌四月から宮崎郡大田村で西洋医術内外科を開業したのです。文中「本邦」とあるのを「日本」と誤解した向きもあるようですが、「三府」とは履歴書が書かれた明治になってからの「東京、京都、大阪」の三府を指すと考えられますので、退庵自身の認識として「本邦」とは「日向地方」を指し、従つて、その種痘実施が「日向地方で初」であつたことは文面からも明らかでしょう。

ちなみに、筆者には「種痘人名録」冒頭文の「歸于宮崎」という表現も気になる点です。この「宮崎」が、当時の日向国五つの郡の一つである宮崎郡（今の宮崎市周辺）を念頭においたものとすれば、それは健海が居を構えていた坪谷村（臼杵郡）からは遠隔の地で、「宮崎に帰る」とは、健海にはそぐわない表現のように思えるからです。しかし、冒頭文中に見られる「到于崎陽」「蘭人Womlike君為師」「得是術」「歸于宮崎」「施之」の行為はすべて健海の行為であるはずで、「到于崎陽」と「歸于宮崎」が対をなした表現であると見る以上、「宮崎に帰る」を健海以外の他者の行動と解することにも無理がありません。健海にとつてなぜ「歸于宮崎」なのかは、結局今後の宿題となります。

現段階では、健海が種痘伝授のために長崎へ行った時期については謎ということにしておきますが、少なくとも退庵の長崎行きは健海と示し合わせた上でのことだっただらうし、それに

は健海の知識・知恵や長崎での修業中の人脈が十分活かされたに違いないと考えます。

健海は、「痘痂」を持ち帰った退庵の活動に全面的に協力し、そのジャワ由来の痘苗（モーニツケ株）を植え次いで美々津へ赴いたと思われる。そして、美々津での接種こそは、健海自身の活動として、これまでに培った地縁・人縁をフルに活かしたものだっことは想像に難くありません。

#### (四) おわりに

『種痘人名録』には、当初の嘉永年間（八十五人分）だけでなく、後の計四期にわたる安政・文久・慶應の時代の種痘（百五十七人分）も記録されており、これ自体、種痘伝来・普及の黎明期における自筆の記録として珍しく貴重なものですが、さらに、次男純曾（牧水の叔父）を指すと思われる「純三」が明治八年に記録した『諸所種痘人銘録』や明治十九年（一八八六）純曾発行の「種痘済証」を示す記録（東郷町史）もあり、親子二代にわたる種痘医の記録『人名録』は稀有ではないかと思えます。

天然痘はすでに地球上から駆逐されたと言われながら、その病原菌がテロの手段にされかねないという物騒な話が出てくる時代ですが、歴史舞台への再登場を許してはなりません。種痘伝来史上での先陣争いの詮索はもはや無意味になつておりますが、幕末から明治にかけて、多



諸所種痘人名録（本会所蔵）

くの医師たちが幼い子供達の命を守るために繰り広げた壮絶な闘いの歴史に想いを馳せるとき、その戦列の第一線に健海も加わっていたこと、また、種痘普及の黎明期の空に輝く群星の一つであったことは、大いに誇りうる事実です。彼の生誕二百周年を数年後に控え、平成十九年（二〇〇七）は彼の没後百二十年。キリの良い節目の年の話題として、是非伝え残して置きたいものです。

最後に、拙稿の取りまとめに当たっては、先人達の多くの著作文献に負うところが多く、文中で逐一紹介するには至らなかったことをお断りいたしますとともに、貴重な誌面に拙稿掲載の機会を下さり、また、取材に当たつてご協力いただいた、林理事長をはじめ関係の皆様により感謝を捧げます。

#### 「余話1——カメとの縁——」

健海が長崎で蘭学・医学を修め、坪谷村に住居を定めたのが天保七年（一八三五）と考えられている。大悟法はこれ以後の長崎での修学を認めていないようだが、筆者は、健海の履歴に照らし、天保十四年（一八四三）末まで長崎で修業を重ねたと見る。この間の天保十三年、三十二歳の時に、当時十七歳のカメ（文政九年（一八一六）八月二十二日生れ）と結婚しているが、新婚早々でも海外留学を続ける例は現代でもよくあることなので、不思議な話ではない。

黒木晩石編『美々津郷土誌（講談社）』によれば、後に妻となる福田家の娘カメが幼い頃に健海の診察を受けたことがあるという。当時の流行病で命も危ぶまれたらしいが、一向に治らないので訴えたら、こともあるうに「ハナクソ」を処方したとのこと。伝え聞いたカメが吐き気を催し、それがきっかけで快方に向かったらしいというエピソードがある。カメの縁続きと思われる「福田実次郎」が、健海とカメについての興味深い話として親友に語ったものである。

カメの母は、女の子三人程を連れて、坪谷村の隣村下三箇の水野栄吉（健海が江戸で知遇を得たという）に再嫁したが、もともと美々津の福田家の出とされる。この福田家の福田実次郎こそ牧水の中学時代の日記（明治三十六・七年）にしばしば登場する人物と思われ、牧水は「兄

さん」と呼んでいたらしい。後に神戸に移住、書家(号「六津」として名をなし、その令息が福田徹一氏(東大名誉教授 故人)である由。

カメについて、大悟法は「彼女は、夫健海が体が大きく酒も嗜まず極めて謹厳であったのと反対に小がらでかなり酒好きで、また極めて陽気な性質で、三味線も引き唄も歌うという風であった。」(『若山牧水伝』)と記しているが、これは、彼女が典型的な美々津育ちだったことを物語る。

美々津は古来瀬戸内海方面への海上交通の要衝とされ、港町として栄えたことは、備後屋、播磨屋、伊勢屋、河内屋などといった商家の屋号にも偲ばれるし、「美々津千軒」と呼ばれる町並みにも当時の面影が残っているといわれる。当地には、「美々津で唄を歌うな」という言葉があるそうだ。すなわち、出入りの船乗りや商人たちによつて上方での最新流行の唄が伝えられるため、日向では美々津の人々が一番早く流行歌を覚え、巧みに歌いこなしたということを示しており、カメもそのような雰囲気の中で育つたことがうかがえる。

### 「余話2 — 医師の腕前 —」

健海がどの程度の腕前の医者だったか、名医だったか、敷衍医だったかは知る由もないが、当時蘭学を修め西洋医学を学んだ医者といえ、相当の名声があつたに違いない。カメの幼時に

彼が診察をしたことがあるというのも、その経歴がもたらした名声が頼られたのだろう。

客観的な判断の手掛りになりそうな資料は、『種痘人名録』と『御薬種之通』である。

まず、『種痘人名録』を見ると、記載された種痘の実施日の並び方が概ね「七・八日目毎」となっており、宗建著『牛痘小考』等に示された考え方に沿っている。また、善感しなかつた場合は、再種痘すべきこととされているが、健海にはその実施例もある。また、植え継ぐばかりでなく、「古種」を用いた例もある。これは痘痂のことと思われ、その活用は、宗建がモーニツケに進言してジャワから再輸入した際の考え方に沿つたものといえる。いずれにしても、牛痘法についての十分な知識に基づいての種痘活動であつた。

次に、『御薬種之通』は、当時の薬種商延岡の棟津屋文蔵による記録で、健海が購入した医薬品のリストである。ほとんど漢字ばかりの毛筆体による記録なので解読には相当苦心するが、明治五年(一八七二)のリストを見ると、購入薬種は約一三〇種類ほどにのぼり、このうち約二〇種類が、シーボルトが示した医薬品リスト『薬品応手録』に収載されている。健海の医療内容をこれから推測するのは少し乱暴かも知れないが、健海が「シーボルト医学」を学び、実践していたことを示す一つの有力な証拠といえるのではないだろうか。



『御薬種之通』四種 (本会所蔵)

牧水が「おもひでの記」(「比叡と熊野」所収で「シーボルトに仕えた」と記しているのは時代的に見て誤りであるが、シーボルトの弟子たちを通じて間接的に学んだ健海は、シーボルトの孫弟子といえる立場だったといえよう。

### 〔余話3―師事した二人の漢学者―〕 (朝川善庵)

江戸後期折衷学派の漢学者(天明元年(一七八一)〜嘉永二年(一八四九))。片山兼山の末子で、父を幼時に失い、母の再婚先の医者朝川默翁に愛され、若い時期に京阪・九州各地を遊歴している。

「向両国小泉町」に居を構えていて、文政八年(一八二五)健海が十五歳で弟子入りした頃は四十歳台の後半で、折衷学派の学者として相当の評価を受けていて、弟子も多く、また、大村藩、津藩、水戸藩などの諸侯からの招聘により江戸の藩邸で講義をしたり、天保十三年(一八四二)には、大村に赴いたりもしている。しかし、書籍代のために生活も苦しく、書籍を質草にした時期もあったとされる。

彼の若い頃九州各地遊歴の経験談は、弟子たちの西国遊学の気持ちをやが上にも高めたことだろうし、九州に至るまでの随所に知己、同学の士を持ち、弟子たちの西国遊学に当たって色々の計らいをしたことは間違いない。

彼は、古書に埋もれた学問一筋の生活から、

晩年には健康を書し勝ちで、持病の「喘気」に悩まされていた(津藩・平松榮齋文書「朝川善庵書簡」)。なお、彼は、朝川家に養子を迎え、病弱だった息子の立造に、自らの出身の片山家を継がせている。

ちなみに、健海が自分の長男に「立造」と名づけたのは、善庵の篤学への尊敬の念とともに幼時に父と死別したという同様の境遇への共感があつたのかも知れない。

### (亀井昭陽)

江戸後期の漢学者(安永二年(一七七三)〜天保七年(一八三六))。彼の父南冥は、西国随一の漢学者として名を成し、東国にもその名は知られ、「漢委奴国王印」の金印の鑑定でも名を残す。福岡藩が二つの藩校を創設した際、東学問所修猷館に対する西学問所甘棠館の祭酒(館長)となつて、徂徠学を教えたが、後に幕府の意向に反するとして、「寛政の異学の禁」により失脚した。

息子の昭陽は、「著述極メテ多シ。壮年ヨリ戸ヲ閉テ力ヲ著述ニ用フルコト数十年、一日ノ如シ」(広瀬淡窓の評)といわれる努力家で、その学問は父南冥をはるかに凌ぎ、さらに亀井門の発展を期していたが、火災で書籍・原稿の大半を失い、後継者が次々と他界するといった災厄にも見舞われ、苦衷と不安の中にあつた。彼は善庵とも昵懇の間柄で、健海の気持ちを汲ん

だ善庵は、漢学だけでなく医学にも明るく、長崎事情にも通じていた昭陽に健海のことを託したに違いない。

文政十二年(一八一九)、健海が十九歳で師事した時、昭陽はすでに五十七歳。その年の暮れに隠居し、自らは著作に専念しているの、健海は、昭陽最後の弟子だったのかもしれない。健海の漢文好きについては牧水も触れている。

「晩年村の気の利いた青年たちを集めて講義をしていた」(「おもひでの記」というのも、この亀井門下での青春の日々を思い起こし、その経験を活かしてのことだっただろう。

なお、健海入門以前のことだが、亀井門下には、岡研介(周防国・今の山口県平生町出身)という俊秀がいた。英才の誉れが高く、文政六年(一八二二)に、シーボルトの鳴滝塾で初代塾頭となつた。師シーボルトの信任も厚かつたという。

健海が福岡にいた間に、時代は暗転、いわゆるシーボルト事件が起き、これに連座してシーボルトの弟子たちも捕われたり、逃亡の憂き目に遭っているが、岡研介は幸いにも難を逃れた。その後、事件の心労もあつてか精神を病み、故郷に戻つた。健海が彼に会うことはなかつただろうが、その英名は常に念頭にあつただろうし、筆者の妄想だが、その名前が「健海」を名乗る際の深層心理をなしたかも知れない。

「健海」は珍しい命名であるが、当時長崎で

学ぶことは今の海外留学にも匹敵し、「海」には国際的なニュアンスがあつたろうし、また、永住を決めた日向国の美しい海、まさに「健やかな」海こそが、彼の心を強く捉えていたのだと思う。

### 【余話4 — 長崎 —】

江戸から長崎までの里程は、約三百二十里（一二〇〇キロメートル余）。幕末当時の旅は、一般的には徒歩によつたので、一日に八里（約三二キロメートル）も歩けるような相当の健脚であつても一月半前後は優にかかる長旅だつた。

実は、健海は、長崎へ直行したのではなく、いったん福岡に足を止め、亀井門下で約二年半修学しているが、福岡までも一月前後はかかっているはず。路銀をどのようにして貯えていたのだろうか。向学の志止みがたく、健海はこの旅を決意したと想像されるが、その行動には幕末の若者の意気を感じさせられる。

当時、鎖国政策の下で先進の医学を学ぶためには、長崎で蘭学を学ぶことが必須だつた。江戸時代に長崎へ赴いた学究を「遊学者」として調査した『長崎遊学者辞典』（平松勘治著 溪水社）によると、遊学者の数は一〇五二人、彼らは全国津々浦々から、もっぱら陸路をはるばる長崎まで歩いてくる。この辞典には、個人名リストがあるが、調査の限界もあつたのだろう、残念ながら、出生地別に見た埼玉県関係者（六

名）の中にも、宮崎県関係者の中にも健海の名は見当たらない。



『長崎遊学者辞典』

修学には、長い期間と多大の労力・費用を惜しまなかつたとされる。目的別に見ると、医学・蘭学が七割近くを占め、実学習得のために圧倒的に多かつた。遊学に要する費用は、往復の旅費・滞在費・修学費など多額にのぼり、多くは藩命による遊学者で当然藩が負担したが、「医師の子弟や向学心に燃える若者たち」は、「医学修業、蘭学修業のため自費で長崎に遊学し」、

彼らの多くは「旅費、生活費、修学費は質素」「学問研修は真剣」で、帰郷後は開業や侍医としての出世等で成功の道を歩んだとされる。ところで、江戸出立の時期や身分こそ違え、同じ師（善庵）を仰いだ二人の弟子（健海と方庵）が、同じく医学への志を抱いて同時期に長崎に着いたことは極めて興味深い。

方庵は、『西征日記』、『柴田方庵日録』及び『柴

田方庵日録撮要』といった彼の日記類の中で、長崎における交友や現地事情についてかなり克明な記録を残している。ここに彼と健海の交流の手がかりがあるかも知れないと考え、かなりの期待を持って調べてみたが、この二人の交流をうかがわせる直接的な記録は、残念ながら見出し得なかつた。しかし、日記・日録から読み取れる長崎事情や彼の生活振りからも、同時期の健海の姿が想像できてなかなか面白い。「異国禽獣見物」「蘭船見物」「唐人・蘭人墓見物」「蘭学稽古初ム」「豚眼解剖」等と並んで「蘭学諸生大会」という記述もあり、方庵との接触も想像できるし、健海の姿も浮かんでくる。

### 【余話5 — 日向に落ち着いた事情 —】

健海がなぜ日向国の山深い地に居を構えたのか。牧水は、「おもひでの記」に、「どうして日向の様な田舎へ引き籠つたか不思議である。当人の云ふところによると江戸に帰る途中、難船して日向の地に吹き着けられたといふのであるが、これは無論嘘である。おもふに何かさうした人に知られぬ山の中へ隠れ度いか又は隠れねばならぬ必要か々あつて引込んだものに相違ない。」と記している。

筆者も、これを例のシーボルト事件に関連した事情が隠れていると推測する。事件に連座した者のうち、難を逃れたものの一部が、瀬戸内海周辺に住み、連絡を取り合っていた可能性



坪谷の牧水生家

があるし、シーボルトの娘が二宮敬作(宇和島藩)に養育を託されていた事情等も考えると、孫弟子的立場の健海も、一旦事あらば、自分も何らかの役割を担おうと考えたかも知れない。居を構えるにあたって、瀬戸内海航路の最西端に位置し、海の要衝とされた美々津の港に近い場所を視野に入れたのは当然と思える。大悟法は、『若山牧水伝』で、健海が江戸で知り合った「水野栄吉」が「日向に来るようにすめたため」であり、「坪谷を選んだのは水野家との縁故もある」と述べているが、それも大きな

理由の一つには違いないだろう。

話が横道にそれるが、健海は、天保六年(一八三五)当時は二十五歳、長崎で修業中と想われる時期に一時帰郷している。当時長崎での滞在には許可が必要で、修業の場合五年が限度とされていた。その一応の期限切れを控え、故郷の祖父の健康状態も気になっていたに違いない。この帰郷の際、祖父元右衛門(天保六年十一月七日没)の弔いを済ませ、墓を建てて、故郷への義理も果たしたと考えたのではないだろうか。彼はこの時点で長崎における修業を断念したわけではなく、天保六年暮れ以降翌年にかけて坪谷村で暫時生活の基盤づくりをし、その上で、再び長崎に赴いたと考えたい。天保八年(一八三七)八月から天保十四年(一八四三)末までの間修業したとする記録(履歴明細書下書)があるにもかかわらず、大悟法は「恐らく長崎での勉学はその天保六年までであったろう」と記している(『若山牧水伝』)が、この経歴を端折るのはあまりに惜しい。当時、縁談を条件に後援者たちの頼母子講によつて長崎遊学資金を援助したという緒方洪庵の例(芝哲夫著『適塾の謎』大阪大学出版会)もあつたし、美々津では頼母子講が盛んであつたと伝えられ、後に縁続きになる水野家からの支援もあつて長崎修学の継続はできたはずである。

さらに、もう一つの理由は、その地域の自然。大悟法は、「溪谷の美しさに心を惹かれたの

も原因であつたらう。」と記しているが、筆者は、それに加えて、この地域(高千穂地方)が、当時多くの薬草の自生地として注目されていたことを指摘したい。ちょうど、この頃のこと、賀来飛霞(豊後国今の大分県)宇佐郡出身の医学植物学者、文化十三年(一八一六)一月生れ、後に小石川植物園勤務)が、延岡内藤藩の意向を受け、弘化二年(一八四五)三月六日から五月八日の間、現在の延岡市を中心に高千穂など日向全域にわたつて踏査して、その成果を『高千穂採葉記』にまとめている。この折、飛霞は、三月二十四日に「延岡ヲ発シ。南高千穂及入郷二葉ヲ採ル」として、健海の診療活動範囲であつた「山三ヶ」(「鬼神野」「神門」)をも歩き回つている。



〈筆者プロフィール〉いとうたくお

一九三九年、佐賀市生れ。東京大学法学部卒。厚生省に入省(一九六三年)、旧環境庁自然保護局長、公害健康被害補償不服審査委員会などを

歴任。現在、(財)地球・人間環境フォーラム、(財)国民公園協会、(財)自然保護助成基金、(財)予防接種リサーチセンターなどの役員を勤める。本会会員。

第一七回中学生短歌コンクール

今を詠んでおこ

第一七回中学生短歌コンクールには、市内一五校から総数一七三九首の作品の応募があり、前年を三〇〇首も超えた。うれしいことだった。それぞれがひたむきに詠まれているだけに、入選歌五〇首を選ぶ作業は大変だった。

特選作品について寸評を記してみる。

梅雨あけて祖母と一緒に梅を干す伝統の味  
受けついでいく 石垣利恵 (大平)

ひとつひとつ梅を干す意味や手順を教わりながら祖母と作業をしている作者、体験をしてみても伝統というものを実感する。

「おはよう」と君が笑ってくれたから朝の階段軽い足どり 松原佳菜 (第二)

俵万智の『サラダ記念日』が下地にあつたかも知れない。が、作者の率直な具体的表現は、その時の心おどりを手にとるように伝えてくれる。

草をやり牛と正面見つめ合うおもしろい  
とそつと声かけ 海野明美 (第四)

牛と正面から見つめ合うという動作に作者の心のかたが表出された。おもしろい問いかげに牛はもぐもぐと応えていたに違いない。

妙心寺昇りて降りる龍の絵ににらみつけられ負けぬとにらむ 渡辺フアビオ (第五)

臨場感あふれる作品。幼さを残しながらも意志

の強さを垣間見せていて頼もしい。

キュッと鳴るうぐいす張りのわたどのは足に伝わる日本の歴史 高久乃 (第五)

古代の建築文化を予習して来たのであるう、いまそれを足で踏んでみて、改めて畏敬の念を覚えていく作者。百聞は一見に如かずか。

俺の夢コックになると決めているこれから  
夢を現実にする 杉本逸太 (第二)

かつきりと夢を持っていることのすばらしさ、下句のひきしまった決意の吐露も快いし、初句の俺もきいている。

カモ肉を食べると言われはしが出ず田んぼ  
のカモが目にかんだよ 星谷忠佑 (大平)

ごちそうとしてのカモ肉、でも箸が出ない。田んぼのカモがふと脳裏をよぎった。その心情の振幅をすかさずとらえて詠み得た一首である。

海からの真つ赤な夕日に照らされたわたし  
はゆつくりわたしを歩く 塚本七海 (市立高等部)

全身を照らされながら夕べの渚を歩む。わたしを客観視した象徴的作品で、結句は中学生にしては大人っぽい詩的表現である。

温暖化ぼくたちのせいで進んでく地球がど  
んどんこわれてしまう 三好雄己 (第五)

現代の世相を自分に引き寄せての内省の姿勢は得難い。地球へのいとおしみが伝わってくる。

字が雑といわれなくてもわかっているいい  
じゃないのよ人それぞれで 杉本悠希 (眺秀)

中学生らしい奔放な一面が率直に表現されているが、事実はともかくとして「雑」ではなく「下手」と置き代えてみたらどうだろう。



沼津牧水祭碑前祭での表彰式 (平成18年10月15日)

二度とやって来ない中学生という「今」をみ  
ずみずしい感性で詠んでおきたい。一、二年生は再びトライし、三年生は心に歌を忘れずにい  
て欲しいと思う。短歌を詠む行為は自分探して  
あり、いつかきつと力となつてくれるはず。

須永秀生、曾根耕一、杉山芳春、川口和子、  
星谷亜紀、青木朝子が選に当たった。(青木朝子)

## 第一一回若山牧水賞に 坂井修一氏の歌集『アメリカ』と俵万智氏の歌集『プーさんの鼻』

平成一八年度の第一一回若山牧水賞は、坂井修一氏の歌集『アメリカ』（角川書店）と俵万智氏の歌集『プーさんの鼻』（文藝春秋）に決まった。二名の受賞は六年ぶりで二回目。なお、坂井氏夫人の米川千嘉子氏が一昨年の第九回で受賞されており、夫妻での受賞は永田和宏（第三回）河野裕子（第六回）夫妻に次いで二組目となる。選考結果について「四十代の男性と女性が、それぞれの立場で現代社会の課題にスポットを当てたという意味において、二冊そろうことに若山牧水賞としての意味があった」と、選考委員の一人である伊藤一彦氏は評した。



（写真提供 宮崎日日新聞社）

授賞式は平成一九年二月五日（月）宮崎観光ホテルで行われた。運営委員長の東国原知事の祝辞の後、選考委員の岡野弘彦、馬場あき子両氏の講評があり、選考委員の佐佐木幸綱氏による「木の名前・鳥の名前」の記念講演が行われた。翌六日（火）には、坂井修一氏の「牧水という奇跡」、俵万智氏の「牧水の恋のうた」と題した受賞記念講演会が日向市東郷地区文化センターで催され、約四五〇人が聴講した。

坂井修一氏は一九五八年愛媛県生れ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。東京大学教授。七八年「かりん」に入会。歌集『ラビュリントスの日々』で第三一回現代歌人協会賞、第四歌集『ジャックの種子』で第五回寺山修司短歌賞受賞。その他の歌集に『群青層』『スピリチュアル』『牧神』がある。歌集『アメリカ』からの作者自選作品を紹介する。

はくれんの散りのさびしさ語らひしむかし  
の花ぞひたぶるに散る

嘘かまことかわれも知らねど声にいふあ  
もう一度日本捨てたし

ものいはず見開くのみの子のイラクの子 わが  
子は見開くことのなかりし

コンピュータ猿のおもちやになりはてし悪  
夢ありわれはなかなか覚めぬ  
棲紅蝶その北限を押しあぐる神のごとしや  
見えざるちから

俵万智氏は一九六二年大阪府生れ。早稲田大学第一文学部日本文学科入学後、佐佐木幸綱氏の影響で短歌を始め、八三年に「心の花」入会。第一歌集『サラダ記念日』で第三二回現代歌人協会賞。評論『愛する源氏物語』で第一四回紫式部文学賞受賞。小説『トリアングル』が阿木燿子監督の映画「TANUKA 短歌」となつて話題になる。その他の歌集に「かぜのてのひら」『チヨコレート革命』など。歌集『プーさんの鼻』からの作者自選作品を紹介する。

腹を蹴られなせかわいいと思うのか よつ  
こらしよつと水をやる朝

パンザイの姿勢で眠りいる吾子よ そうだ  
パンザイ生まれてパンザイ

年末の銀座を行けばもとはみな赤ちゃん  
だった人たちの群れ

生きるとは手をのばすこと幼子の指がプー  
さんの鼻をつかめり

初対面の新聞記者に聞かれおりあなたは父  
性をおぎなえるかと